

令和4年度病害虫発生予報第11号

長崎県病害虫防除所長

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

農作物名	病害虫名	発生程度	
		現況	予想
きゅうり	べと病	並	並
	うどんこ病	並	並
	褐斑病	少	少
	灰色かび病	並	並
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	やや少
	コナジラミ類	少	少
トマト	黄化葉巻病	やや少	やや少
	灰色かび病	並	並
	コナジラミ類	やや多	やや多
いちご (本圃)	うどんこ病	並	並
	灰色かび病	やや少	やや少
	アブラムシ類	並	並
	ハダニ類	並	並
	アザミウマ類	並	並
たまねぎ (早生)	べと病	並	並
	白色疫病	並	並
	ネギアザミウマ	並	並
茶	カンザワハダニ	少	少

【発生予報】 本文の( )内は平年値

きゅうり

1. べと病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(9筆)の結果、発病葉率は1.7%(2.8%)、発生圃場率は33.3%(23.3%)であった。

2. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(9筆)の結果、発病葉率は10.9%(3.4%)、発生圃場率は55.6%(43.8%)で、一部多発圃場が見られた。

3. 褐斑病

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(9筆)の結果、発生を認めなかった(発病葉率0.0%、発生圃場率1.0%)。

#### 4. 灰色かび病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病果率0.0%、発生圃場率0.8%）。

#### 5. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率2.0%、発生圃場率24.4%）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 施設内および周辺の雑草は生息・増殖源となるので除去する。

イ ミナミキイロアザミウマは黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV：メロン黄化えそウイルス）を媒介するので、防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P158～161の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

エ 栽培終了後は施設開口部を密閉し、日中の室温50℃以上を10日間維持し、本虫を死滅させ、施設外への分散を防ぐ。

#### 6. コナジラミ類

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、寄生葉率は0.1%（0.8%）、発生圃場率は11.1%（15.7%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 密度が高くなると防除が困難になるので、黄色粘着トラップを施設内に設置して早期発見に努め、発生初期に防除する。

イ タバココナジラミは退緑黄化病の病原ウイルス（CCYV：ウリ類退緑黄化ウイルス）を媒介するので、防除を徹底する。

ウ 退緑黄化病の発生が多い状態（発病株率40.4%、発生圃場率100%）が続いており、次作に持ち込まないよう防除対策を徹底する。

エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P158～161の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

オ 栽培終了後は施設の開口部を密閉し、日中の室温50℃以上を1週間以上維持し本虫を死滅させ、施設外への分散を防ぐ。

### トマト

#### 1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、発病株率は0.0%（0.4%）、発生圃場率は11.1%（20.3%）であった。

#### 2. 灰色かび病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、果実での発生は認めなかった（発病果率0.0%、発生圃場率2.1%）。発病葉率は0.0%（0.2%）、発生圃場率は11.1%（12.6%）であった。

### 3. コナジラミ類

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（9筆）の結果、寄生葉率は1.9%（1.1%）、発生圃場率は55.6%（34.1%）であった。

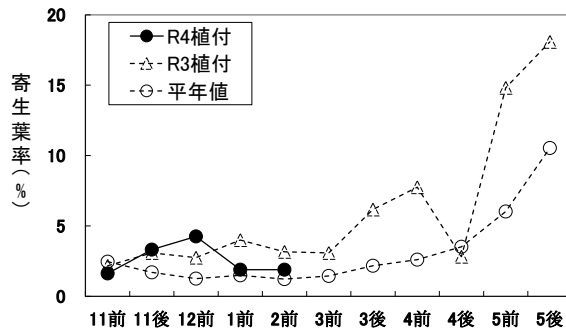


図 トマト コナジラミ類 寄生葉率の推移

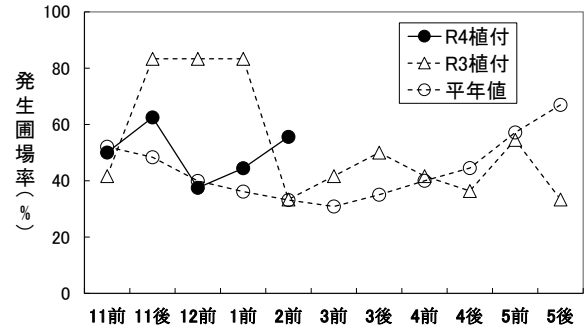


図 トマト コナジラミ類 発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 密度が高くなると防除が困難となるので、黄色粘着板等で本虫の発生状況を把握し、早期の防除に努める。

イ タバココナジラミは黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）を媒介するので、防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P186～189の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

エ コナジラミ類は葉裏に多く寄生しているので、かけむらがないように丁寧に薬剤散布する。

オ マルハナバチを使用するハウスでは、影響の少ない薬剤を使用する。

カ 施設内の雑草は、本虫の増殖源となるので除草を徹底する。

## いちご

### 1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（27筆）の結果、葉および果実での発生を認めなかった（発生を認めない）。

### 2. 灰色かび病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（27筆）の結果、発病果率は0.0%（0.1%）、発生圃場率は3.7%（18.2%）であった。

### 3. アブラムシ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（27筆）の結果、寄生株率は1.4%（0.9%）、発生圃場率は11.1%（12.1%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早期発見、早期防除に努める。

イ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵への影響を考慮する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P216～219の「作用機構による分類（IRAC）参照」）の薬剤の連用を避ける。

#### 4. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（27筆）の結果、寄生株率は6.4%（8.5%）、発生圃場率は51.9%（49.6%）であった。

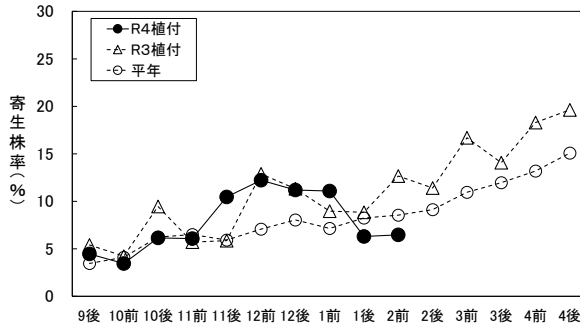


図 いちご ハダニ類 寄生株率

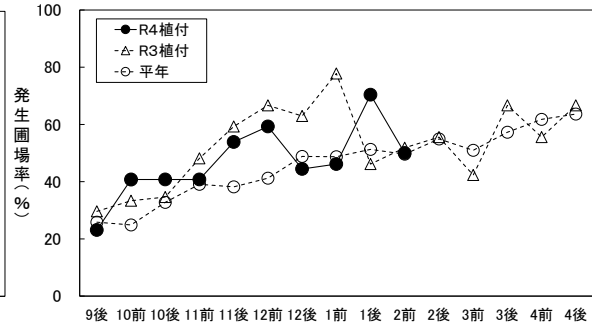


図 いちご ハダニ類 発生圃場率

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早期発見、早期防除に努める。また、防除効果が高めるため薬剤散布前に古葉を除去し、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵のカブリダニ類等への影響を考慮する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P216～219の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

#### 5. アザミウマ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（27筆）の結果、寄生花率は1.0%（過去7か年平均0.8%）、発生圃場率は37.4%（同 27.7%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早期発見、早期防除に努める。

イ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵への影響を考慮する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P216～219の「作用機構による分類（IRAC）参照」）の薬剤の連用を避ける。

### たまねぎ（早生）

#### 1. べと病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査（16筆）の結果、発病株率は0.01%（0.04%）、発生圃場率は12.5%（11.0%）であった。

イ 1月23日の臨時調査（10筆）において、べと病の一次感染株の初発が確認された（前年度初発生1月14日）。

ウ 2月14日の臨時調査（10筆）の結果、発病株率は0.04%（前年同時期0.03%）、発生圃場率は20.0%（前年同時期20.0%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りをこまめに行い、発病株（一次感染株）を発見したらできるだけ早く抜き取る。抜き取った株は圃場内に放置せず、孢子が周囲に飛散しないよう、その場で直ちに袋等に入れて圃場外に持ち出し、適切に処分する。

イ ベと病は条件が整うと感染と発病を繰り返し急激に蔓延するため、今後の気象情報等に留意し、一次感染株の見られる圃場では早急に薬剤散布を行う。また、発病が見られない圃場でも2月中下旬以降は定期的な予防散布を行う。

2. 白色疫病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（16筆）の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

3. ネギアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（16筆）の結果、寄生株率は12.8%（10.7%）、発生圃場率は62.5%（47.2%）であった。

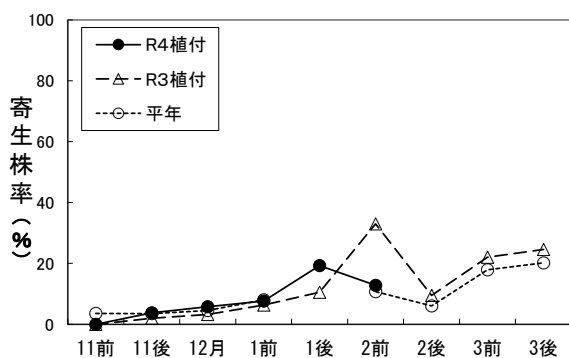


図 アザミウマ類 寄生株率の推移

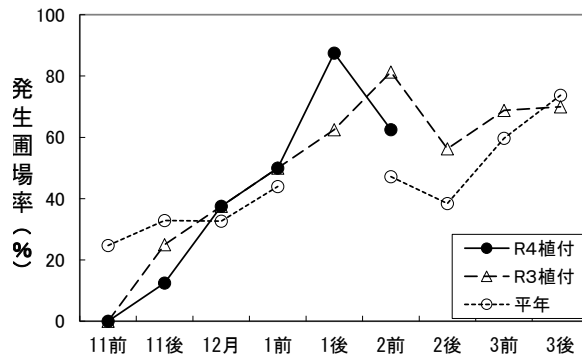


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発してからの防除は困難であり、気温が高くなると急激に発生が多くなるため、早めの防除対策に努める。

イ 本虫の寄生により吸汁されると病害の発生を助長する恐れがあるため、発生が見られる圃場はすみやかに薬剤散布による防除を行い、散布にあたっては心葉にしっかりと丁寧に散布する。

茶

1. カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（15筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.6%、発生圃場率13.3%）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 2月下旬頃から産卵を始めるので、一番茶の被害を予防するため早春の防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和4年長崎県病害虫防除基準P430～433の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

